



空き家利活用コンテスト2022 優秀賞



住宅部門

事例 05

Y邸

日本家屋の良さを生かしつつ、  
間取りや内装で“自分らしさ”を表現



「新居は大山に近いところがいい」。スノーボードが共通の趣味という夫婦は、常々そう話し合っていたという。そんなとき不動産サイトで見つけたのが、明治36年建築の古民家。米子市の中でも大山寄りでグレンデへのアクセスが良い好立地。しかも、建築内装デザイナーであり古民家をリノベーションして住みたい妻、自動車整備士でありガレージが欲しい夫、それぞれの望みが叶えられそうな物件に魅力を感じ、購入に至った。

4部屋あった和室のうち、玄関側の2部屋はつなげてフローリングのリビングに改修。コスト削減のため、木部の塗装や壁の珪藻土塗りなどは可能な限りDIYで施工した。鴨居の高さが175cmしかなく閉塞感があったが、天井を取り払って吹き抜けにしたことで開放的な空間に仕上がった。

奥の2部屋は、リビングから続く畳の間と家族の寝室に。リビングと畳の間を取り囲む広縁の障子を外し、部屋の一部として活用しているため、家の中は改修前よりかなり広く感じられる。そして敷地内に建っていた納屋は、夫念願のガレージに大変身。夢が実現した古民家で、家族和気あいあいと暮らしている。

天井を取り払うと、明治時代の建築ならではの小屋組と大きな梁が現れた。この家もともと持っていた魅力的な部分を“見せる”ことで、雰囲気が大きく変わった。白い珪藻土の壁はスクリーンにもなり、映画館気分を味わえる。



丈夫な差鴨居は、ハンモックを吊るしてもびくともしない。冬は薪ストーブが大活躍、これ一つで家全体の暖が取れる。



(写真左) 各部屋をぐるりと取り囲む広縁を、部屋の一部として使用。家の中に明るい陽光と爽やかな風を入れてくれる。  
(写真上) リビングに隣接する畳の間。端正な和室の魅力をそのまま生かした。



畳の間は幼い子どもたちの遊び場所でもある。個室感がありながら、遮るものがないので目が行き届く。  
押入があったところは板場に改修し、現在はおもちゃ置き場として使用している。



(写真上・左下) 玄関は昔ながらの土間で、靴や自転車等の収納にも困らない広さがありがたい。

(写真右下) 母屋の西側に建っていた納屋はガレージ兼倉庫に。自動車整備の工具やスノーボードなどが所狭しと並ぶ。



[ DATA ]

- 【所在地】米子市下郷 【構造】木造2階建て
- 【築年月】明治36年 【改修後の用途】住宅
- 【間取り構成】個室2室、リビング、ダイニングキッチン、風呂、トイレ、  
ガレージ（別棟木造2階建て）
- 【改修期間】2016年11月～2017年11月
- 【改修費用】約2,000万円
- 【設計者】キミトデザインスタジオ